
狂った少女はただ笑う

真田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狂った少女はただ笑う

【Nコード】

N2726Z

【作者名】

真田

【あらすじ】

執行者 NO14 表裏比興

そんな肩書きを持つ執行者の少女。リア。そんな少女が魔都クロスベルにやってくる。

理由、それは…

「里帰りだけど、何か問題でも？」

元執行者のオリ主はそれなりにいるけど現役の執行者はあんま見ないなあ。自分が知らないだけかもしれないけど。なんてふと思い書いてみた二次創作です。興味のある人はぜひともクリック！

ブローグ 夢の話

最初に言っておくわ。これは夢の話。ほとんど毎晩見ている夢の話。とっても大きな赤い水たまりがあるのよ

それをなめてみると鉄っぱい味がする。

それでこれは水じゃなくて血なんだって気づくの。

私はそれに驚いて近くに何があるのかを見渡してみる。

そしたら、血溜りの中心に一人の女性の死体が転がってて、私はそれに近づいていくの。

そして、近くで顔を見るとそれがお姉ちゃんなんだってことに気づく。

それがわかって泣きそうになると、いつの間にか私は一本の長剣を片手に立ってるの。

その長剣からは血が滴り落ちていて、それに気づいた私は剣の剣腹をじっと見つめる。そこに自分の顔が写る。

その顔や髪にはたくさんの返り血が付着してて、とっても汚らわしい。

それを見てから初めて私は周りを見渡す。

そこにはさっきのお姉ちゃんの死体はどこにもなくて、代わりにた
くさんの死体が転がってるの。

そこで、私が殺したことを思い出す。そして、死体のうちの一つが
言うの。

コノ、ウラギリモノガ…

そして、何かが壊れたような音が響く

は……は……は……あはは……
……は……は……は……あ……は……
……あはは……
……は……は……
……はは……
……アハハ……

第一話 結構明るめな話

「すっげ…さすがクロスベル…」

そう驚きの表情を浮かべたのはどこか浮世離れた一人の少女。
真っ白な髪を腰のあたりにまで伸ばし、赤色の目をしていて、顔も十人中九人は可愛いと思うんじゃないかな？ってなぐらいに可愛い容姿をしている。服装は真っ白な着物のような袖の長い服で、帯の部分は鮮やかな赤色。下は赤のミニスカにピンクのニーソックスという和風か洋風かどっちかにしたら？と言いたくなる服装だった。あ、ならない？そうでしたかすいません。

それはともあれ、その少女はあたりをもの珍しそうにきよるきよると思回していた。例えるなら田舎から上京してきた田舎者だ。そしてそれは別に全部が間違いというわけでもない。

時刻はまだ昼ということもあり、そこはまさに都会といった感じの人通りの多さだった。高いビルがいくつも鎮座しており、目の前を横切って行くたくさんの人。しかもたまに導力車も通って行く。

「導力車って初めて見た…」

そんなことに軽く感動を覚える。昔と随分変わったなあ…と寂しさ半分物珍しさ半分といった心情だった。子供のころはここらへんに住んでいたのだが、ちよつとした一軒でアルテリア法国に引っ越しているのだと八年ぶりとかそのぐらいだったはず。

そしてその少女は初のクロスベルの景色を十分に堪能してから、これからすべきことを思い出す。

「大きな鐘の前とか言ってたっけ…」

まず、彼女はしばらくここで生活するつもりでいた。そのためにはまず家をどうにかしなければなるまい。残念ながら昔住んでいた家などは当に売り払ってしまっている。さすがに好んでホームレス生活をしたいなどとは思わない。

そこで彼女の所属している組織…ぶっちゃけると「結社」なのだが、あの中では一番話の合うカンパネルラが何らかの便宜を図ってくれたらしく現地で案内してくれる人間を紹介してくれるとのことだ。カンパネルラが見せた好意に正直『熱でもあるんじゃないか？』『実はドッペルゲンガーだったりするのじゃないだろうか？』などと思いつつも、人からの行為をわざわざ無下にする気にもならなかったので、とりあえずお願いしておいた。実際にドッペルゲンガーかと聞いてみたら「心外だなあ」とか言いながら割ってた。

そしてその待ち合わせ場所がここであるのだが…

「…あの人かな？」

その中央に鎮座している、大きな鐘の前のベンチで座っている青年を発見する。…そして彼女は深呼吸をした。なにせあの時紹介してくれたのはカンパネルラだ。絶対普通の人間ではない。あるはずがない。絶対に面白がって何かを仕掛けたに決まっている。星杯騎士団の守護騎士なんて可能性なんかは濃厚である。

ここで考えていても仕方がないと思い、声をかけようとしたが先に青年のほうが気づき声をかけてくる。

「こんにちわ。クロスベル警察の者ですが…」

なんで警察？カンパネルラはいつたい何をした？なんかの犯罪の濡れ衣かぶせられた？

「貴方が支援要請を出されたリア・ルアルデイさんでしょうか？確かクロスベルの案内をしてほしいという内容でしたが」

「えーと…ちょい待ち」

支援要請…？

と少女…リアは幼いころより教え込まれた知識やら、生まれつき持っている頭の回転の速さを回転させ…納得した。

たぶんこの人が友人の紹介したという案内人というのであっているのだろう。用意したというか警察に頼んだ…なんで警察なのかという疑問は置いておこう。カンパネルラの考えることはわからないし。しかも今のところ裏もなさそう…

え…？

…何もなさそう…だと…

明日は嵐だ…今日中に住むとこ決めないといけないようだ…

「どうかしましたか？」

「あーいや、何でもない。ちょっとぼーっとしてて…改めまして。私が依頼を出したリア・ルアルデイ。今回はよろしく」

リアはどこか気の抜けたようなへらへらとした笑みを浮かべる。

「ご丁寧にも。クロスベル警察特務支援課。ロイド・バニングスです」

「あ、別に敬語じゃなくて結構いいわよ？同い年ぐらいだろうし」

「いえ…さすがに仕事ですし…」

「私は気にしないからさ」

というと、ロイドといった青年は少し表情を和らげて言った。

「君がそういうのなら…短い間だけでもよろしく」

「ん、こちらこそ…さっそく案内してくれるかな？まずは家を探したいから」

「家を探すって…どこか親戚の家に泊まるとかじゃないのか？」

「違うわよ？一人暮らしになるわね」

「そうなのか…」

ふーんという表情をしつつ、ロイドはリアと視線を合わせる。

「それじゃあ、行こうか。家ならまずは行政区に行って空き家のカタログをもらってきた方がいいと思うけど…」

「そこらへんはお任せするわ。あ、でも余裕があつたらこの町の見どころの案内もお願いしていい？それと家はなるべく安いところがいい」

「はは……了解」

「へえ…普段は四人なんだ」

「そうなるかな。今日は全員で行動するよりもこっちの方が効率が良かったから別行動だけどね」

そんな雑談をしながら今は東通りに来ていた。行政区で空き家の力タログをいくつかもらってきたのでそれをもとに家を周りながらクロスベルの案内してもらっている。

「露店とか多いのね」

「結構新鮮な野菜とかが手に入るから結構繁盛してる。あ、あとそこが遊撃士協会になるかな」

と、ロイドが指さした方向の看板には確かに遊撃士協会と書かれていた。あ、そういえば…

「ヨシュエスが今ここに来てるんだっけ？」

「ヨシュエス…？ああ、ヨシュアとエステルのことか？」

「うん、そんなとこ」

ロイドが何か聞きたげにしていたが、それよりも露店に面白そう

なものを見つけたので、そちらに足を進める。

「にがトマト…だと…なんていうものを出荷しているんだリベール…と、こっちは共和国の…」

にがトマトとはその名の通りリベール産のものすごくにがいトマトの事だ。あれで作ったジューズをよく罰ゲームと称して飲まされたなあ…ちよつとトラウマを刺激された…あ、でもちよつと懐かしいな…どうしようか…

「へえ…そういうのって結構詳しいのか？」

「ま、いろんなところ行ってきたからそれなりにいろんなことは知ってるわよ？帝国のおいしい料理とか、共和国のおすすめの観光場所とか…あ、面白そうなのでいえば『銀』のファンタスジックな噂も聞いたことあるわね」

と、にがトマトを置いている店の前で立ち止まりながら何気なくつぶやいた瞬間。ロイドの顔色が変わった。

「『銀』の事を知ってるのか！？」

「知ってるというか…共和国の人間なら誰もが…ってほどじゃないけどそこそこ有名な話よ？伝説の凶手なんて呼ばれてる。それがどうしたの？」

そういうとロイドは数秒だけ考えこんでから少し口を濁してから言った。

「…ちよつと警察の方で追ってる事件に銀が関係してるかもしれないんだ。それでその『銀』の情報が欲しくて、情報を集めてるところでさ。よかつたら聞かせてくれないか？」

「へえ…どんな事件なの？」

「…そういうことは守秘義務があるから言えないんだ。すまない」

そんな警察の立場としての言葉に、リアは別にそこまで興味があったわけでもなかったので特に追及する気もなく、にがトマトを手に取りながら言った。

「ふーん…ま、いいわ。といっても私も大したことは知らなくてのよね。私の知ってることと言えば『銀』って言うのは伝説の凶手…まあ暗殺者とか刺客とかそんな感じの人の事。その人は何世紀もの時を生きて暗器や札を駆使して狙った獲物は確実に葬る…とかいう私の聞いた話ね」

「何世紀って…眉唾物じゃないか？」

ロイドが聞くとリアはにがトマトの購入を本気で検討している様子でありながらも質問に答える。

「そうでもないわよ。知り合いにちよつと裏社会関係の人がいて、その人曰く『銀』って人に依頼を頼めばほぼ確実に依頼を完遂してくれるらしいし」

「…え…」

あつさりと裏社会というセリフが出てくるとは思っていなかったのかロイドの顔が微妙にひきつっている。やがて戸惑い気味に問いかける。

「その人とは…その…大丈夫なのか？」

「いい人よ。それと銀の事だけど…何千年生きてるとかつてのはなんかカラクリがあるんでしょ。まあ、『銀』は本当に何千年も生きる化け物だった！…みたいな展開があつたりするかもしれないけど」

「いや、そんなに生きられないだろ」

苦笑しながらロイドが言うとりアはふざけた様子もなく真顔で答える。

「そう思う？でも世の中って不思議で満ち溢れてると思うわよ。常識で考えられない事って結構多いんだから」

実際にカンパネルラって全然年取ってるように見えないし。あれも不思議だよなあ…と心中で呟きつつ。やっぱり怖いもの見たさ的な感じで買っておこうということにがトマトの購入を決定し、気よさそうなお兄さんにミラを支払う。

「それと『銀』が最近黒船とか言うマフィアに雇われてクロスベル入りしたみたいだけど…さ、次行こ」

「君はいつたい何者なんだ…」

「ふふ。そこは秘密。ミステリアスな女性に男性は引かれるってね」

「そ、そうか…」

「ま、冗談はさておき…次は旧市街ってところに行ってみたいなあ。あそこのマンションが格安じゃなかったけ？」

とロイドに聞きながらさっそくにがトマトをかじってみる。……………

くおおおおお…や、やっぱり苦い…

「吐きそう…」

「…大丈夫…か？」

「あんまし…好奇心は猫をも殺すとはこのこと…」

もうこれ買わない。と心に誓いつつ、2、3回深呼吸をして何とか持ち直す。と、さりげなくロイドがジュースを差し出してくれた

のでそれを一気に飲みし口直し。

「ふう…ありがとう」

「どういたしまして。というかそんなに苦いのか？」

「食べてみる？」

と、まだ一口しか食べていない…というかこれ以上食べたくないにがトマトを差し出す…いや押し付ける。いやもう代わりに食べてくださいお願いします。

「それじゃあ、一口だけ…」

と言つてロイドも怖いもの見たさなのかパクリと一口。と、そこで今更ながらリアは気づいた。そしてちよつといたずらっぽい笑顔を浮かべ、わざとらしく呟いてみる。

「これって関節キス…？」

「~~~~~！？」

のどに詰まった！？

「あ、ちよつ…大丈夫！？そこのお兄さん！そのお茶頂戴！」

まさかそこまで慌てるとは思わなかったリアが慌ててお茶を購入。それをロイドに差し出す。それを一気に飲み干していた。

「はあ、はあ…ふう…」

「えと…大丈夫？」

「…何とか」

と言うロイドの顔が少し赤い。それを見て悪戯っぽく笑う。

「顔赤いよ？どうしたのかな？何を考えたのかな？ほれほれ、お姉さんに言ってみ？可愛い女の子と間接キスできて嬉しいとかさ」

「あ、え、あ…と、とにかく！次は旧市街だっけ？さっそく行ってみようか！」

「……………ま、いいわ。それじゃあお願い」

顔をそむけ、背中を見せてさっさと歩きだしたロイドをリアはにやにやしながら追った。

第二話 あいさつとか墓参りとか

結局のところ新住居は旧市街にあるマンションの小さな部屋に落ち着いた。最後の最後までロイドは治安が悪いからと心配していたものの、安いし上に特に不満があるわけでもない部屋だったのでここに決めた。というか一般人が彼女を襲うこと〓死亡グラフである。いや冗談ではなく。

「ありがと、ロイド。助かったわ」

「いや、これも仕事だからね。困ったことがあればまた連絡してくれ」

「うん。了解。遊撃士よりも早くした方がいい？」

「ははは……」

と、最後に苦笑いを浮かべながらロイドは去って行った。さて。

「どうしよっかなー……」

まあ、ここクロスベルに来たのはただ単にリアが所属している結社で結構大きな一件がリベールで少し前に終わったのだ。ずっと自分は裏方で表舞台には一切出なかったけど。そしてしばらく暇でどうせ行きたいところもないし故郷に帰るかなと思っただけであり、しばらくはここに滞在するつもりだ。と、思いながら安物の部屋ゆえに別にふかふかであるわけでもないベッドにダイブする。さて……どうしようか……と、脳内でやるべきことというワードで脳内検索をかける。しかしそれで出てきたのは案外少なかった。ま、とりあえず……

「……行っただ方がいいわよね」

まだ一度も行っていないしな…などと思いながらベッドから起き上がる。その前にどこかで花買ってこないと…などと簡単な予定を立てる。

「ついでにお隣さんにあいさつでもしてこよっかな」

礼儀は大事だね、うん。

リベールを大混乱に陥れた犯罪組織の執行者とは思えないことを呟きながらリアはベットから体を起こした。

「いなかった…」

お隣さんは留守にしていた。噂では気立てのいい若い娘さん。巨乳。ずっとどこかに出かけていて家にいることは少ない。らしい。仕方ないので出直してくることにしよう。それでも他の何人かの人間には挨拶してきたのだが。いまだき礼儀正しい子だと穏やかなおばあさんに褒められた。うん。褒められると結構うれしいものがある。

「~~~~」

と、少しだけ機嫌よくマンションのドアを開き外に出ると…

「てめえ！サーベルパイパーなめんじゃねえぞゴラ！！」

「つぶ…これだから野蛮人は…」

今にも喧嘩をおっぱじめそうな二つの集団があった。片方は赤いジャージ。もう片方は青いフード付きのジャージ。

「平和ねえ…」

かなり一般人よりかけ離れた感想を漏らしつつその集団を避けながら歩き出す。自分から厄介ごとに巻き込まれる理由はない。と、そんな時。

「やあ、久しぶりだね」

「？」

そんなリアに涼しげな男の声がかかる。こんなところに知り合いがいるはずが…と思いながら後ろを向く。そこには青いジャージの集団を遠目に見ていたらしき涼しげな男が…

「つぶ…くつくくははははは！！！！」

ツボに入った。

「いきなり笑うっていうのはなかなか失礼じゃないかい？」

「ご、ごめ…ぶつくく…い、いやだって…つぶ…ははは…っ…ワ、ワジク…つぶくく…な、何それ…に、似合います…ふふ…くくく」

そこに立っていたのは身喰らう蛇の天敵。永遠のライバル？ナルトとサスケ？いやこれは違うか…まあ、それはいいとして、星杯騎士団の守護騎士とよばれる結構なお偉いさん。ワジだった。

ツボに入った理由。それは服装にあった。似合わないわけじゃない。むしろ似合いすぎてた。普段と違ってなんかきつちりした服じゃない、腹チラしているというイケメン以外の男が着るには危険な服だというのに。おっそろしいくらいに似合ってた。それが逆にツボに…

「やれやれ…一応僕らは敵同士のはずなんだけどね」

「まあ、細かいことは気にし…ふふ…つくく、はははは」

やばい。これ普段ならシリアスでないようなシチュエーションなのに。まさかこれも作戦！？こうやって笑わせて戦えなくする気！？…んなわけないか。アホらし。

「ぜえ…ぜえ…ふう…よし。落ちついた。改めて久しぶりね。ワジ君」

「そうだね。あれ、少し身長も伸びた？」

「うーん…どうだろ。こういうのって自分ではわからないしね…あ、アップスもおひさー」

友好的にあいさつしたのに微妙に殺気を出しながら戦闘態勢を取られた。あいさつはしっかりしないとダメだよ。人間第一印象っていうのはものすごい大事なんだから。いや初対面じゃないけど。

「ま、いつか…それはそれとして。こんなところでなにしてるのよ？」

「ふふ…今の僕は『テストメンツ』っていう不良のヘッドだよ」

「どっちの？」

「青い方」

ワジが指さしたほうを見る。

「各員！聖戦の準備だ！」

聖戦って…

「神父さんが何やってるのよ…罰当たりじゃない？」

「ふふ…まあ、いいじゃない。それで、君は何しに来たんだい」

「微妙にはぐらかされた気はするのだけど…ま、いいわ。大したことじゃないしね。ただの里帰り」

「…つぶ、アハハハハハハハ…！！！」

今度はワジがツボった。

「ふふ…いやいや、執行者が里帰りって…なかなか面白いジョークだね」

「うん。これなかなか腹立つね。殴っていい？つか殴るぞゴラ」

「お互いさまじゃないか」

「…それもそうね。ま、ここであなを殺したとしても大して得しないし」

真顔で物騒なことを言うリアに対しアツパスは警戒を強める。というかアツパスの反応が普通なのであって、何度か本気で殺しあったこともあるこの二人が和やかに談笑しているほうがおかしい。

「ま、そういうわけでき。ここはお互いに知らぬふりしようよ。こんなところでそんな不良のヘッドなんかしてるってことはなんか訳ありなんですよ。………そういえばこの教区長ってあなたたちの事

嫌いだったけどそれと関係あるのかしら？」

「ふふ、さすがは『表裏比興』鋭いね」

「それで？」

「いいよ。僕だってこんなところでいきなり殺り合いたくはない」

「ふふ…そっか。それじゃあ、今からただのご近所さんになるわけね。よろしく」

リアは和やかに笑みを浮かべる。友好的でどこか愛想笑いにもとれる普通の笑み。

普通としか表現できない、適度に不自然なところのある笑み。

それを見てワジは言う。内心では警戒しながらそれをおくびにも出さずに愛想笑いを浮かべる。

「フフ、こちらこそ」

「びっくりした…」

まさかあんなところでワジに合うとは思わなかった。本気でなんでもいるの？とはいえ考えて判断できるほどに情報も集まっていらないので一旦その思考は打ち切る。まあ、一応整理はしておこう。

まず、星杯騎士団とは？から説明しようかと思う。誰にかつて？おいしい、野暮なこと聞くなよ。そこは流すのがお約束だろ、ジョニィ。

まず前提としてアーティファクトと言う大昔に作られた古代遺産と言うものがある。それは物によって効果は違うもののものすごい力を持っている。そんなものを「一般人が持つていいもんじゃねえんだよゴラ！だから俺らによこせや。なに、素直に渡せば痛い目みずすむぜ？」みたいな事をやってる組織だ。ちよつと乱暴な言いようだがあながち間違つてはないと思う。

まあ、言い分も分かるんだけどね。確かに誰かがしなくちゃいけないことではあると思う。

そんな組織と何故敵対しているかと言えばだ。

まあ、アーティファクトを保持してるんだよね。『身喰らう蛇』って。というか星杯騎士団とは別で自分たちの目的のために使うためだから、星杯騎士団とは真っ向から対立するような関係になってしまう。私利私欲のために使う人間からアーティファクトを没収するための星杯騎士団と、私利私欲のためにアーティファクトを集める結社。対立しない方がおかしい。

と、そんな関係でワジを含め守護騎士とは数回殺りあった。全部適当に逃げたけど。

以上。説明を終わります。

「ケビンじゃないのはよかったけどさあ」

と、呟きながら、彼女は教会の敷地内にある墓場に佇んでいた。…
うん。星杯騎士団のクロスベル支部ともいえるような場所にだ。ま
あ、ここのお偉いさんは星杯騎士団のことを嫌ってるし何とかなる
だろう。

そんなリアの手には三つの花が握られておりそれぞれ白、青、黄と
なっている。

「…うる覚えでしかないけど…あってるかな」

クロスベルでの風習で墓に沿える花はこの三色の花だと決まってい
た。…たぶん…きつと…おそらく…会ってるといいな…

だんだん自信がなくなってきたが間違っていたとしても出直すの
は面倒だったので気にしないことにした。気にしたら負けという奴
だ。たぶん嘘だ。

そんなくだらない自分の思考にリアは苦笑を浮かべつつ、改めて
目の前の光景を眺める。彼女の前にはたくさんの墓石が視界いつぱ
いに広がっていた。

「えーと…順番に見ていくしかないわね…」

約十年ぶりに来た場所なので忘れていたり、いくつか新しい墓石が
建てられていたりと目的の場所がわからない。幸い時間はタップリ
あるので一つずつ順番に石に刻まれた文字を読んでいく。

そして半分くらい確認したところだろうか。

「見つけた…」

そこには『セレナ・ルアルディ ここに眠る』とだけ書かれていた。
持ってきていた花をそつと添える。

「久しぶり、お姉ちゃん。亡くなってから十年間。一度もこれなくてごめんなさい」

もう、涙が出てくることはない。長い時間が経ったから。風が吹き、リアの純白の髪が風にもてあそばれる。

「いろいろあったんだよ。ゼムリア大陸の全国各地を回ったりしてね。なんというか…ほんと国によって雰囲気って違うんだね。同じ人間なのに…驚いたよ」

そんなどうでもいい話。しかしそんな言葉にも返事はない。当たり前だ。これはただの大きな石なのだから。そんなの…分かっている。分かってるんだ。

しばらくの間じっと墓石を見つめる。

………

………

………

………

…

「なんで…お姉ちゃんだったの…？」

どのぐらいの時が立っただろうか。リアは無意識にぽつりとつぶやく。

「世の中お姉ちゃんよりもダメで、くだらなくて、生きている価値もないような糞みたいな人間がたくさんいるのに。なんでそんな奴らじゃなくてお姉ちゃんなの？なんで死んじゃったの？お姉ちゃんが何かしたの？何か悪いとをしたの…？」

今まで一度も吐き出すことのなかった思い。

すべて吐き出す。

そして、自分のしゃべっていることに可笑しさを覚えた。今の自分はその生きている価値もないような糞みたいな人間の一人なのに。

「もしもお姉ちゃんが生きてて…そして今の自分を見たら…叱ってくれた？…怒ってくれた？…だったら…いいな」

それは自分を愛してくれてる証明でもあるから。でも、その答えはもうわからない。もう本人はいないのだから。

そして幾分落ち着いてくると、馬鹿らしい…と自分の事を鼻で笑う。何がしたかったんだろう私は。

「…バイバイ。また来るから。今まで来れなかった分。たくさん、たくさん」

そういつて。その場を後にした。

第三話　ちよい伏線と星見の塔へ

クロスベルのどこかにある一つの部屋。そこな中に二人の人間がいる。

両者二人とも全身を覆う黒衣のローブを身に着け、動物をかたどった仮面をかぶっている。顔はおろか性別や年すらわからない。

「隊長。報告に上がりました」

「どうだった」

隊長と呼ばれた人間に対し、おそらく部下なのであろう人間は、尊敬の念を込めた眼差しを向け報告を始める。

それは、様々な情報だった。ルパーチエ商会の事、黒船ヘイユエの事という裏の情報から、遊撃士や警察への市民の目。そんな真面目な報告に交じっておいしい料理の店とか言うよく分からない物まで。統一性のないもの。

共通点の一つ。クロスベルでの事だと言うことだ。

そして港湾区のラーメン屋はうまいという報告を最後に従のほうは口を閉じた。

「聞けば聞くほど歪な場所だな……」

「……え？おいしいラーメンの店を聞いてなんでそんな感想？」

「馬鹿者。今はシリアスパートだぞ。黙ってる」

「……すいません」

それだけ言って両者共口を閉じる。そしてその情報の分析というのは全くやらなかった。

彼らは理解していた。自分たちは主の手足。命令された以上の働きはしないし、そんなことをしても成果を上げることなどできない。

動くのは俺たち。どう動かすかを考え、利用するのが主だった。

「…最後に直接は関係ないのですが、一つ気になることが」

「なんだ？」

「星見の塔。及び月の僧院と呼ばれる場所で上位三属性が働いているようです」

「なに…？」

上位三属性と呼ばれるのは空・時・幻の三属性の事だ。

「具体的には？」

「まだ詳しいことはわかっていませんが、そこに出没する魔獣に対するアーツの効き方が異常だということです」

その確かに不可思議な報告に隊長と呼ばれた男は静かに数秒間黙考する。

「主は、おそらく何人かを調査に向かわせようと指示するだろう。

星見の塔には私が行こう。月の僧院とやらには三人、いけそうな者に準備させるように。編成は任せる。以上だ。下がれ」

「っは！」

そう返事をし部下と思わしき男は半透明になり虚空に消える。そんな不可思議なものを見ても隊長はいつもの事だともいうように平然としている。

「魔都クロスベル。なかなかお似合いな名前じゃないか」

そう無感情に最後に呟き、黒衣の男も虚空へと消えた。

時と場所は変わり。

「だから私じゃないって言ってるでしょ。冤罪だぞー！訴えてやる！」

「それじゃあ、あなた以外に誰がいるんですか？」

「知らないわよ。たまたまタイミングが悪かっただけよ」

そんな会話をしているのは二人の女性。片方はリア。もう片方は警備隊の制服を着た女性だった。名をノエルと言うらしい。

sonでもってここは星見の塔と呼ばれる場所の入り口であり、入り口に立てられていたバリケードは完全に粉碎されている。

「だから、私がここに来たのはただの興味だって言ってるでしょ。

来たら壊れてたのでラッキーってことで入っただけだって、ね？納得してよ」

「そんなウソ信じられるわけじゃないですか。それ以前にここは一般人立ち入り禁止です」

「ほらほら、そんな厳つい顔しないでさ、もっと笑って笑って。しかめっ面でいるのは損だよ？」

「誰のせいだと思ってるんですか！」

「それは永遠のミステリー！。少なくとも私ではないわね」

わけのわからないことを言うリアだった。

そもそもどうしてこうなったかと言えばだ。今日は墓参りに行った翌日。リアは、ちょっと気になることを聞いたのと、ただ単に暇だったこともありこの中を探索してみようという気になったので来てみたら、入り口をふさいでいたのであるうバリケードが粉々になっっていた。

常人なら『なんでだ?』みたいに多少疑問に思うであろうこの状態を見たりアは「ラッキー♪」などと言う軽い感想を抱きつつ中に入ろうとしたら…

なんかいるのね。後ろから装甲車が走ってきてるのね。しかもなんかその女の子止まりなさいとかスピードカーで言われるのね。しかもこの場には壊れたバリケードと、中に入ろうとしている私がいる。

そんで「バリケードを壊して一般人の立ち入り禁止区画入ろうとしている不審者」と言うふうに勘違いされて今職務質問を受けているといったところだ。というか不法侵入自体は事実だったりする。

そんな感じでかれこれ十分ほど不毛な言い争いをしたところだろうか。そんな時に第三者の声がかかる。

「どうしたんだ? 曹長」

「あ、皆さん。お久しぶりです」

「あれ、ロイド? どしたの」

そちらを見るとロイドを筆頭とした四人グループがいた。知ってるのはロイドだけだけど。昨日言ってた支援課のメンバーだろうか?

「ああ、誰かと思えばリアか。昨日は情報ありがとう。助かったよ」
「いや、ただの噂話だし、お礼を言われるほどじゃないわよ」
「なんだロイド。この可愛い子と知り合いか？」

そっくりなのは赤毛のチャランポランそうな男。それとロイドのほかには育ちのよさそうな同年代の女性。そして…自分より年下の女の子。

青というには少し薄い水色の髪。

ぺったんこな俎板のような胸。

どこか冷めたような印象を受ける整った顔立ち。

さほど高くない身長。

「抱きしめていい!？」
「何言ってるんですか…」

その女の子を見た瞬間にリアの目が変わる。アニメ的に例えれば星になった感じ。リアは素早く女の子の背後を取り、いきなり抱きしめ始めた。周囲はドン引きである。

と言うかドン引きしないような人間がいるだろうか？初対面の幼女といってもさほど間違いではない女の子に対して、鼻息荒くして、迫り、いきなりを抱きしめる…これがもし中年のおっさんでだったら確実にアウトだ。

女に生まれてよかった！

今この時ほど、彼女が女として生まれてきたことに感謝したことはないだろう。

「おお…レンちゃんと十分張り合える抱き心地…」

「離してほしいのですが…」

そんな普通の人間なら慌てる…というか軽く身の危険を感じるような状態でもその女の子はクールだった。冷静にその拘束を解こうとする。そんな抵抗を感じるとリアは素直に離れて行った。

「ケチ」

「初対面の方ですよね？」

ぶーっと不満そうな表情を向けるリアに女の子は南極の氷びつくりの冷たさを誇るジト目で答える。クスン…何よ…ちよっとしたスキンシップじゃないの…

「ロイドさん。この方は？」

小さな女の子が唯一リアを知っているロイドに問いかけ、ロイドは昨日町案内をした事を説明する。そしてリアには、この人たちが警察の同僚だと説明した。

「ティオ・ブラトーです」

「ティオ…？」

復活したリアがそう名乗った小さな女の子…ティオの顔をまじまじと見る。可愛すぎて鼻血でそ…じゃなかった。…あの時の…？

その事に関しては、今は関係ないので一旦思考の隅へと追いやるとして、ほかの二人もすごいメンツだ。

赤毛でしかも苗字がオルランドの男。あれと同じ赤毛だし、ほぼ間違いなく、あの化け物の息子さんだろう。…あれを一時期利用したことあったけどマジで化け物だよ…その父親の弟もだけど。

それともう一人のマクダエルという名字の女性。たぶん市長の娘さんだろう。あの市長さんひげが立派だよな！

リアも端的に最低限の自己紹介を済ます。

「と、それいいとして…曹長とリアはどうしたんだ？なんか陰悪な雰囲気だったけど…」

「冤罪をかぶせられそうになってる。ほら、ロイド達警察の出番よ！いや、それ以前に男なら弱い美少女が困ってたら助けてあげないと！」

「この人がバリケードを壊して侵入しようとしてたので…」

「だから、壊してないって…」

「ああ、ほらほらリアも落ち着いて。俺たちにも分かるように説明してくれ」

そんなロイドの声にリアは何度か深呼吸をしてから、ノエルとともに説明を始めた。

「事情説明なう」

「ねえ…それって…」

「うん…俺もたぶんリアじゃないと思う」

「どういうことですか？」

育ちのよさそうな巨乳…じゃなかった女性…エリイとロイドがそういう。ノエルがなぜかと聞くと、ロイドはその事を説明しはじめる。

？イリア・ブラディエという大スターに銀と名乗る人物が不吉な手紙を送りつけ、それを支援課で調査することに。

？そしていろいろあつて、今日の朝『銀』から挑戦状？みたいなのが届き色々なところを回った結果今ここで特務支援課を待ち構えているということが分かったらしい

？そんでもってたぶんそっちが原因じゃね？

てな感じの内容だった。それを聞いたノエルは特に疑うこともなく、リアを申し訳なさそうに見る。

「そうですか…えと、リアさん。すいませんでした」

「あ、いいいいいよ。女の子だし。それじゃあ、私は行くわね」

と極めて自然な感じで背を向けるリアをそのまま見送り、さて、俺たちも行くか！ってな空気になったところで…

「待った」

何か違和感に気づいたロイドが止めた。

「んー…どうかした？」

「バリケードを壊したのが君じゃないとはいえここは一般人立ち入り禁止だ」

「えー…いいじゃん、別に」

「ダメだ。危ないだろ」

危ないのはリアではない。襲った魔物の方である。

「大丈夫だって、それなりに戦えるから。自分で言うのもなんだけど結構強いよ」

「さつきか弱い美少女が何とか言っただけだったか？」

「ええい！人の上げ足ばかりとって！これだから若いのは…」

「いやいや…」

そんな適当な軽口をたたきながらリアは太ももにつけているホルスターと腰につけている鞘から愛用の拳銃と長剣を取り出す。長剣は黒色。もう片方の拳銃は白で統一されている。しかし、白い拳銃の銃身の下にはただの拳銃にあるはずのない刃が仕込まれており、日光を反射してキレイに光っていた。

「拳銃…？」

「いや、銃剣じゃねえか？」

「そ、ランドル…ランディさん正解。これとアーツと体術が得意かな。まあ、ぶっちゃけ器用貧乏」

あつぶねえ…本名で呼ぶところだった…その銃剣と長剣をしまいながら改めてロイドを見る。

「というわけで。自分の身ぐらいは守れるから大丈夫！」

「いや、だから…魔獣だけじゃなくて銀って言う伝説の凶手も待ち構えてるかもしれないだぞ？」

そのまま長時間不毛な進展のない言い争いを続け…

「はあ…分かったよ。ただし危険だと判断したらすぐに出てもらう

ぞ！」

「OKOK。それじゃあよろしくね」

ロイドが根負けした。

第四話（前書き）

東通りにいるメイリンちゃん可愛すぎる…旧市街で店番やってる
ジンゴちゃんも可愛いよね！

第四話

「おおー綺麗なところね…意外なことに」

中に入って最初に出迎えたのは宙に無数に浮かぶ光。おそらく蜚だろう。近年急激に発達したクロスベルでは見ることでできない物だった。リアはその光景を満足いくまで眺め、脳膜に焼き付けてから地面や近くにある手すりやらを慎重に観察し始める。

「んー…ほとんど人の出入りはなしだけど…つい最近…というかちよつと前に二人ほど通った形跡ありと…どちらも手練れっぽいけど、その中でも一人はヤバイ…足跡に全く乱れもなく重心が安定してる…『銀』かね？」

「二人!？」

ロイドが驚きの声を上げる。

「ちよつと前に二人がここを通ったのは確かね。まあ、銀ともう一人は別口で入った…という可能性はあるけど」

「そうか…」

「…なんでわかるのかしら？」

「よく見れば足跡とかそんな感じのものが見えるものなのだよエリイ様」

「…何で様付け？」

「なんか雰囲気がお嬢様っぽい。実は市長の一人娘だったりするでしょ？」

ハトが豆鉄砲を食らったような顔を浮かべる。…そっぴや豆鉄砲って何？

「まあ…そうだけれど…わかるものなの？」

「人を見る目はあるつもりよ。あと、ランディもなんか隠してるこ
とがあると見た」

と言った瞬間。ランディが怖い顔をした。

「…何のことだ？」

「いやだなあ。『冗談よ冗談。それとも本当に何かあるの?』」

ランディは舌打ちを一つ。そして微妙に空気が重くなる。

「……………」

「ティオ?どうしたんだ」

と、話題を変えようとしてもしたのかさっきから沈黙していたティオ
にロイドが声をかける。

「…どうやらここでは法則が捻じ曲がって上位三属性が働いている
ようです」

「へえ……………」

リアもそれは入った当初から感じることはできていた。ただ、そ
れに誰かが気づくとは思いもしなかった。

「ねえ、教会の関係者だったりする?」

「いえ、全く」

「ふーん……………」

教会のシスターとか神父とかだとそのようなものを感じれるのは

必須スキルだったりするのだが。表情の変化や、息づかい、体の細かい動き。それらを見てもこの少女が嘘をついているようには見えない。ただ、感応力が高いだけ…？まあ、いいや。世の中の事のすべてを理解できるわけもない。

そしてテイオが説明する。

「はい。土・火・水・風それ以外に上位属性と言われる幻・空・時が加わっています。…つまり火や風に弱い魔獣はいても、上位三属性に弱い魔獣はいませんが、その法則が捻じ曲がって上位三属性に弱い魔獣がいると考えられます」

「…お話し中悪いけど構えたほうがいいわよ？」

と言つて太ももあたりにつけてあるホルスターから銃剣を、腰の鞘から長剣を引き抜き、構えを取る。

「もうすぐそこに來てるから…ね」

それが合図だったかのようにそれは現れた。

「中世の錬金術師がつくり出したオーバマペット!？」

そう、その姿はまるで…

「アルフォンスさん？」

鋼を錬金術で武器化する主人公の弟さんを巨大化したものだと思っ
てくれればあながち間違いじゃない。それが二体ほど。

「来るぞ！」

ランディがそう注意を飛ばす。しかしそれ以前にリアは動いてい
た。

動いていたといってもさほど激しい動きではない。白色のパーツ
で組み立てられた銃剣の銃身を右のオーバマペットに向けただけ。
そして、引き金を引いた。それはオーバマペットが大きく後退す
ほどの威力を持ち、鎧のお腹にあたる部分もベコリとへこむ。
しかし、ただの銃弾が飛び出たわけではなかった。

「オーバルアーツ…？」

オーバマペットにヒットしたのはアーツを思わせる赤色の光。そ
れがレーザーのようにヒットしていた。

「ぼーっとしないで！もう一匹は任せるから！」

「あ…っよし、皆行くぞ！」

そのリアの声にハッとロイドが仲間たちに声をかける。その様子
をチラリとみてから、目の前のオーバマペットに視線を戻す。

「やっば、火はあまり効かないと」

そうつぶやくとリボルバーの形をしている銃剣の、本来なら弾丸を入れるための場所…シリンダーを二、三回回転させる。

そうしてから、イノシシのように突っ込んでくるオーバマペットに対して、引き金を引く。すると今度は黒い、時属性のレーザーがヒットしオーバマペットの顔面を打ち抜いた。

この銃剣の特長は弾丸の代わりにアーツのようなレーザーを撃てること。しかもシリンダーを回転させることで属性も変えられるという優れものだった。

そして今、目の前にいるのは頭を失ったことで、視界が完全に失われたオーバマペット。

「戦技…釣り野伏せ」

釣り野伏せとは…かのカルバートよりさらに東にある島国「ニホン」と言う国の軍人の一人。島津が得意とした戦法の一つだ。

まず全軍を三つに分ける。そのうちの一つを敵の前方に配置して囷となり、残りの二つを伏兵として左右に配置する。そして囷の部隊が敵軍と戦闘し、適当なところで伏兵を配置した場所まで退却する。

あとは伏兵と囷部隊で三方から包囲。上手くいけば相手が調子に乗っているところを奇襲できるのでかなり効果的。

ただ、自然な退却に見せねばならず、しかも戦場での退却は容易に部隊が瓦解しかねないのでかなり難度の高い戦法と言える。

そんな技名を叫びつつ、一息で視界を失った哀れな敵へと近づく。

「ハッ！」

一息で呼吸を整える。そしてリアは銃剣を敵の胴体に突き立てる。しかしさほど刃が長いわけでもないので貫くには至らない。でも、それでいい。銃口が敵の体内に入ってしまったえばそれでいい。

そして、敵の体内から銃撃を放ち、アーツ製の弾丸…魔弾ともいうべき銃弾が相手を貫き、消滅させた。

…ちなみにこの技名とさっき説明した戦法との関連性はこれっぽっちもない。ただ単に何となくリアが気に入っているだけである。

「次っ…！」

それを確認した瞬間にリアはもう一体のほうへと視線を受ける。しかしそちらへの加勢はいらなかったらしく、そちらもちょうど片付いたところらしかつた。ほっと一息ついている。

「全部一人で…すごい…」

「ふふん。もつとも褒めたまえ」

ノエルの感嘆したような声にリアは大きくもないが小さくもない…いやどちらかといえば小さい胸を張り自慢げな声を上げる。

「おい、作者。やるかゴラ、アア!？」

ゴメンナサイ。

「でも、確かにすごいわね…あなたいったい何者なの？」

「実は私、身喰らう蛇っていう世界を裏から操る謎の結社の執行者なの」

「…あっそう」

エリイの顔を見て絶対信じてないなこの人と思いつつも信じない。信じないと思つて言つたので気にしない。というか信じられたら困る。というか一部の人間を除き頭を疑う。大抵の人は冗談だと思つたろうし、その冗談が本気だと悟れば頭の痛い人で終わるはずだ。

だつて若い子供がかかる恐ろしき病…中二病っぽい妄想だし。裏から世界を操る組織がいるのを知つてゐる？つて超真面目な顔で友達に言われたらどう思う？…つまりはそういう事だ。

「とにかく、この戦力なら探索できないわけでもなさそうだ。気を付けて進もう」

「了解です」

そんなロイドとノエルを皮切りに探索が始まつた。

「おお…古代語で書かれた本つてところかな…つてかこれゴーレムの作り方の本じゃね…もらつていても…」

「ダメだ。勝手に持ち出していいものじゃないだろ」

「ケチ」

ばらばらと流し読みしてから本棚にその本を戻す…と見せかけてこっそりとウエストポーチに仕舞い込む。帰ったらちよつと読んでみよう。作れそうなら作ってみよう。

そしてなぜここに本があるのかといえば…なんでだろうね？探索してたら大量の本が眠ってる場所を見つけたのでリアが興味津々でぺらぺらとめくり始めたというだけだ。

そんなこともありながらも一行は魔獣を蹴散らしつつ進み、ついに最上階に到着する。

そこには巨大な天球儀と巨大な本棚があつた。しかしそれでも狭いと感じさせることはなく、今まで通つてきた場所と違いがらんとした広い場所だった。…なんか人の隠れてる気配が二つあることにリアは気づいたが、両者ともにいるというだけで場所が良くわからないのでとりあえず無視。用があるなら勝手に出てくるだろう。

と思つた矢先に。

「フフ……。古の錬金術師どもが造つた夢の跡といったところか」

本棚の上から声が響く。そちらを見れば黒装束に仮面をつけた一人の人間がいた。…男？女？どっちだろ…全身が隠れてて体格も分からないし、声も作ってるし、仮面で顔は見えないし。

「お前はっ…」

「黒装束に仮面…」

「出やがったな…」

「フフ、初めまして。特務支援課の諸君。まあ、招かざる客が今日に限って多いようだが…」

と、ノエルとリアを見ながら言う。

「私はただのサポートです」

「私は別にあなたに用事はないし…用事が終わるまでそこで本読めるから頑張つて。と言いたところだけど…まあ、乗りかかった船だし混ぜてもうわよ」

軽口をたたきながらも、いつでも動けるように重心を落とし、軽く全身に力を込めておく。

「まあ、貴様らだけではないのだが…」

と、虚空を見ながら…まるで誰かがいるかのようにつぶやいてから本棚から飛び降り、綺麗に一礼する。

「お初にお目にかかる。銀というものだ。まずはここまでご足労賜ったことをねぎらおう」

「……ああ、随分と引きずり回してくれたもんだな。ちなみに、塔にいる奇妙な魔獣はあんたが用意したものなのか？」

「フフ……あれは元からこの塔の中に徘徊していた。腕を鈍らせないう、齒ごたえのある狩り場を探してこの塔を見つけたのだが。中々どうして、面白い場所だ」

「あんたがやったことじゃないのか？」

と、あての外れたような顔をするロイド。

「まあ、個人でどうにかできることでもないでしょう」

「そうなのよね…ねえ、さっきから気になってるんだけどあなたって男？女？どっち？女だったら正体は誰も知らない孤高の女暗殺者ってな感じで萌えるんだけど」

「萌え…？」

「別に知らなくてもいいわよ」

ロイド。君にその言葉は似あわない…と思う。

そしてこういうタイプは仮面を取るとめっちゃ美少女と相場は決まって…っ！などと黙考していると銀が突如として武器を構える。それは黒塗りの大剣だった。あれ、萌えとか言ってるから怒った？…そうよね…結構かつこよく登場したのに萌えとか言われたらおこるよね…

「どう言つつもり！？」

「弱き者には興味はない。お前達が、我が望みに適う強さを持っているか…その身で証明してもらっぞ！」

「あ、そうですか。無視ですか」

リアの言葉は全面的に無視されたらしく、エリイの疑問にそう答える。それに対して一同は一斉に武器を構えた。

「やっぱりお約束ですか……」

「ねえ、気になって今日の夜眠れなさそうなんだけど。男なの？女なの？」

そうめんどくさそうに言うティオと無視されてもめげずに質問するリア。

「へっ、多勢に無勢と言いたところだが……気をつける！ コイツ、すさまじく強いぞ！」

「どうやら手加減する必要はなさそうですね……！」

「ええ、全力で行きましょう！」

闘志をみなぎらせる一同を、喜ばしそうに銀は見る。

「フ……良い闘志だ。それでは行くぞ！」

「ねえ、何で答えてくれないの？」

銀はその言葉を最後にロイド達に突っ込んでいった。

第五話 『銀』と書いて『イン』と読む不思議（前書き）

主人公の使ってる銃剣のイメージは小型版ベルゼルガー的な。

第五話 『銀』と書いて『イン』と読む不思議

「戦技：鶴翼」

そういつと同時に銃剣を逆手に握る。そして、向かってくる銀が彼女の間合いに侵入したその瞬間。長剣と銃剣の両方を振るい、十字の形に切り裂く。

しかし銀はそれらを間合いの外に空中に逃れて躲す。リアもそのぐらいで仕留められるとは思っていない。相手が躲すと同時に銃剣を持ち替えており、ピタリと照準を銀へと合わせる。そして三回ほど連続でトリガーを引き、赤色の魔弾が銀を貫かんと襲い掛かったが、それすらも空中にも関わらず体を捻って躲す。

「何で空中で動けるのよ…」

なんてぼやいている間もなく銀はそのまま空から空襲してくる。それは落下のスピードも合わさったプラスされた破壊力を秘めリアに襲い掛かる。

「つくう…」

長剣で受け止めたはいいいものの、一撃では終わらない。そのまま地上に足を付けた銀は綺麗な全身を使った動きで大剣で切り付けてくる。最初の一撃で痺れたリアの腕は満足に動いてはくれず防戦一方となってしまう。

しかし、銀の敵は目の前の少女一人ではない。

「おらあっ!」

ランディが脇からスタンハルバートを叩きつける。それを後ろに跳ぶことでかわした銀にノエルとエリイの銃撃の雨が降りかかった。

「ありがとうございます！」

「気にすんな、それより来るぞ！」

銀に視線を戻すと、銃弾の雨を避けながら何やらクナイのようなものを構える。いや、ただのクナイではなく、それに何らかの効果を秘めた札がついていた。

「爆雷符！」

それをエリイに向かって投げつける。それはよける間もなくエリイに向かって一直線に飛んでいく。

「嫌な予感が……アダマンガード！」

その声と同時にエリイの目の前に現れる半透明な薄くありながらも、すべての攻撃から術者を守る鉄壁の壁。札付きクナイはその壁に当たり、爆発することで事なきを得る。

……
……

……つてか爆発！？あれをもし食らったら……クナイにつけられた札が爆発……つまり刺さった状態のクナイが爆発する……体内で爆発する……？

怖すぎる……エグすぎる……

「うおおおおおおおおおおおおおおおお！……」

そんなリアの脳内事情はつゆ知らず。銀にロイドが突撃する。それを見たノエルとリアがそれぞれ右横と、左斜め前から同時に銃弾を浴びせて牽制する。

もはや牽制の域を超えている気がしなくてもない威力を秘めた魔弾と銃弾が同時に襲い掛かる。しかしそれらを銀は軽々と躲し、大剣でいなす。しかし、それでもすべてを躲すには至らない。

脇腹あたりにノエルのサブマシンガンの銃弾がかすり、わずかに隙が生まれる。

そこにロイドが突っ込む。

「はあっ！」

「っち……」

脇腹にそのまま一発トンファアの先端が入る。しかし、入りが浅かったのか、それをものともせずに大剣でロイドを斬り払い、トンファアをクロスさせてガードしたロイドをものともせずに吹き飛ばす。

「ふん。なかなかやるようだが……」

「ふっふっふ……まだだ、まだ終わらんよ！……ってね」

「何……？」

突如。銀の周りの温度が下がり、突風が吹く。

「ダイヤモンドダスト！」

「エアリアル！」

エリイとティオによる二つのアーツ攻撃。

大量の氷の槍と風の竜巻は見事に銀の身体をとらえ、襲い掛かる。

氷の槍が次々と銀を突き刺そうとし、風の刃が銀の皮膚を切り裂く。それらを躲すことを諦めた銀は大剣の下に隠れるようにして構え、ガードの体勢を取る。

しかし、それでも全方位から迫るアーツを防げるものではない。いくつかが被弾し、決定打にはならなくとも確実にダメージを与える。そのアーツの猛攻が終わり一旦体勢を立て直そうとする銀。しかし…

しかし、まだ攻撃は終わらない。リアの戦術オーブメントが駆動していることに気づいたときにはすでに遅かった。

「いっけええええええええ！クリムゾンレイ！」

使うは火の最上級アーツ。

銀の頭上に現れるは灼熱の炎の塊。

それが火の巨柱となり、術者に危害を加えし者を無慈悲なまでに、完膚なきまでに焼き尽くす。

炎。轟音。爆発。

もうもうと大量の土煙が吹き荒れる。

それを見たロイドが言ってしまった。

「やったか!？」

「ロイドさああああああん!それを言っちゃダメ!生存フラグだからあああ!」

フラグの力なのかどうかは知らないが、突如一同の背後から銀が奇襲。リアはそれをぎりぎりのタイミングで受け止める…が、いきなりで、態勢が悪い。そのまま吹き飛ばされる。

「きゃっ!」

中々に可愛らしい悲鳴を上げ背中を打ちつける。受け身を取ることは成功したので思ったほどのダメージはなく即座に立ち上がるが、結構飛ばされたらしく、リアを吹き飛ばした銀と戸惑いながらも交戦しているロイドたちとは結構距離が離れていた。急いで加勢しようとする…

「フフ…こっちにもいるぞ!」

「だあああ!もう!」

横合いからの声に即座に振り向きざまに長剣を真横に一閃。それを銀も迎え撃ち鏖迫り合いとなる。

突如。ドクンツと音が鳴る。

「アハハハっ…！」

思わず出てしまった笑いを次の瞬間には必死にこらえていた。

それは己の心に住む闇。

それは己の壊れた部分。

それを必死に抑える。

そして、仮面を被る。

次の瞬間にはいつものへらへらとした、気の抜けたような笑みを浮かべていた。

「…あのアーツには結構自信があっただけど…何で生きてるのよ？というか何で三人いるの？兄弟かなにか？」

「フフ…影に攻撃しても何の意味はあるまい」

抽象的なことを…と思いながらもすぐさまピンとくる。

「分け身？」

「ご名答。良く分かったな」

それを聞いたリアは笑みを深め、視線を銀の後ろへと向ける。銀はそれを不思議そうに、そして警戒しながらそれを見つめた。

「私も今使ってるしね。わけ身」

「なっ!？」

おそらくこの戦闘で銀が初めて心から驚愕した瞬間だろう。先ほどリアが自分の後ろに視線を向けた、つまりは今後ろにいるのか？そう思い込んだ銀は慌てて鎧迫り合いを解き、真横に飛んで逃れる。

しかし、焦ったがゆえに隙が生まれる。

そのスキを逃すリアではない。リアは銀の胴体へと長剣を突き刺した。しかし、躲かれてしまう。が、完璧に避けたわけではなく、結構な量の血がばたばたと零れ落ちる。

「っぐ…」

それを見て、そして言った。

「あ、わけ身つかってるのって嘘だから」

「…やってくれたな…」

一応、似たような技を使える事は使えるのだが。
しかしそれでもまだまだ戦えそうな銀を見て、感心したように言う。

「しっかしさすがは東方人街の伝説の凶手ってところね。しかもこの人数相手に手加減してるときた」

「フン。手加減しているのはお互い様だろう?」

「何のこと?…って話してて思ったんだけどあなたは本物?偽物?と言つか男か女かの疑問にまだ答えてもらってないんだけど」

「さあ…どうだろうな!」

銀の大剣がリアに迫る。しかしそれなりの量の出血のせいか動きが鈍っている。それでも十分早かったがリアにとっては十分簡単にさばけるレベルにまで落ちていた。そんな斬撃を受け止め、その衝撃に逆らわずに後ろに飛ぶ。そして、ロイド達やり合ってる偽銀の背後から不安定な体制でありながらも銃撃し、完全に不意を突かれた偽の銀が消失する。

そして、最後の一人となった本物だか偽物だか解らない銀を注視しながらすぐさまアーツの詠唱を開始し、リアの身体の周りを白い光で包む。

「これで…ダークマター!」

「こちらにも…電磁ネット!」

リアは銀の身体に圧力をかける重力の塊を出現させ、それで動きの鈍った銀にノエルが静電気を纏ったネットが撃ち込み、短時間だが銀の動きが完全に停止する。

「皆、今のうちに!」

「おっし、任せろ!」

「了解です!」

そういうと同時に、ランディのスタンハルバートに炎が纏わせられ、ティオは魔導杖を変形させる。

「くられ…クリムゾンゲイル!」

スタンハルバートから放たれた炎の衝撃波は狙いたがわず銀に殺到し、大剣によるガードを無理やり貫通させ、思いつき吹き飛ばす。そして空中で勢いのなすままに吹き飛ばされていく銀を…

「エーテルバスター！」

テイオの魔道杖から放たれる、エネルギーの奔流が狙い撃つ。それが空中で吹き飛ばされている銀を直撃し、大爆発を起こした。

「はあ…はあ…どうだ…!?」
「いや…あれは…」

ランディとティオの渾身の攻撃によりようやく銀に片膝をつかせる。が、そのまま銀はピクリとも動かない。立ったまま死んだという弁慶を思わせる光景だった。

死んだように、動かない。しかし、あれぐらいで死ぬような使い手ではないと半ばリアは確信していた。まさか…

と、とある可能性…いや、やっぱり…?と、とある可能性に思い至ったリアは即座に周りの気配を探る。

そして、銀の姿が揺らいだかと思うとふっと消えてしまった。

「なっ…」
「消えた…」

ランディとリアを除いた全員が表情を驚きに染める。当然だ。別に銀じゃなくても目の前で人が何の痕跡も残さずに消えればそりゃあ驚く。あ、よく見たら札が残ってる。痕跡が何もないというわけでもなかった。そして札が残ったということは…

『そちらの二人はなかなか出来るようだな』

そして、少し離れた場所から、銀が虚空より姿を現す。

「い、いつの間に…!?!」
「き、気づかなかった…」

「戦闘中に分身だけ残してそこで高見の見物つてわけか。恐ろしく腕が立つようだ…あまりいい趣味とは言えねえな」

ロイドとノエルが呆然とつぶやき、ランディが忌々しげに顔を歪

める。

「ふふ、気に障ったのなら謝罪しよう…しかしリア…といったか。貴様は気づいていたみたいだな」

「…気づいたのは直前だし、もしかしたらつてぐらいの物よ…というか本当に何体分身作る気なのよ？ 実はあなたも偽物だったりしないわよね？」

「そう思うのか？」

「…まあいいわ。それで、まだやるの？」

ムスツとした不機嫌そのものといった感じの表情を浮かべながら問いかける。なんか全部がこいつの手のひらの上といった感じで全く持って面白くない。手加減していたとはいえそれは相手も同じだし。

「ふ……まあ、いいだろう」

銀はそう言つて大剣をしまう。もはやことを構える気もないらしく、あまりいい雰囲気とは言えない物の、緊迫した空気は霧散する。と、ここからは特務支援課の仕事だ。正直顔もよく知らない大スターの事などあまり興味はない。彼女のイリアへの知識はなんかの大スターだということだけである。というかそもそも彼女が銀と戦闘を行ったのはただ単にロイドたちと一緒にだったから成り行きで言うだけなのだ。本来なら闘う理由もない。

「ロイド、私は屋上行ってる。終わったら教えてちょうだい」

返事も聞かずに背を向け、屋上へと続く階段へと足を向ける。気になっていたことをさっさと解決してしまうとしよう。

「うーん…」

と、うなるリアの目の前には大きな鐘が鎮座していた。それを見ながら珍しく難しそうな顔をしている。直感では何となくこれがこの場での異常…上位三属性が働いている原因のような気がする。こういう直観っていうのはなかなか当たったりするし…と思いつつ、とりあえずぐるりと回ってみる。特に変わったものはなし。ただのでかい鐘だ。

「うーん…」

再び唸り、目の前の鐘をじっと見つめる。…鐘、鐘…鐘ってどう使う物？…鳴らすもの。では鳴らすにはどうする？

「叩く…だよな」

そついうわけで、とりあえずノックするような感じでトントんとたく。変化なし。

というわけでふうと深呼吸してから…

「はあっ！」

十分に勢いの乗った回し蹴りを鐘に命中させる。

カーン…カーン…

それと同時に鐘特有の大きく、どこか厳格な印象を与える鐘の音が響く。それをリアはわずかな変化も見逃すまいといった様子でじっと見つめる。そしてその大きな変化はすぐに訪れた。

「ビング…かしらね」

突如鐘が青く発光し始め、彼女のこれまでの短い生涯でありながらも、濃厚な経験がこの鐘から霊的なものを感じとる。

「アーティファクトで間違いはなさそう…かな…」

確固たる証拠があるわけじゃないが、見た目がただの鐘にしか見えない物が光っているのだ。アーティファクトじゃなかったらなんだという話になる。これがこの場の属性を狂わせているのはほぼ間違いないだろう。

「報告だけはしておこうかしら…」

この鐘を見ながら、深刻そうな顔をしてつぶやき…そして不機嫌そうに顔をゆがめる。

「とりあえずこの音を止めよう…」

この鐘かなりうるさい。と言う事でどうやって止めるかを考えてみる。

物理的に止める…一人じゃ無理。三人ぐらいで四方から抑え込みでもしないと無理そう。

「なら…」

薄く目をつむり、意識を集中させる。

「空に住みし空の女神以下略」

そんな、法術と呼ばれる術の詠唱。ふざけた詠唱。しかし、そんな詠唱とは裏腹にリアの手が白く輝く。

「縛」

同時に現れる白き鎖、それが鐘の周りへと出現し、その鎖は鐘を縛るかのように密着する。同時に、鐘を含めた光の鎖が白く発光し始め…

「止まった…わね」

こういう縛るっていうのは女の子にやりたいなあとかばやきつつ、この鐘をあんまりむやみに鳴らさないことにしようと心に決める。そして、そろそろもどろっかな。と思いながら下の階へと続く階段を降りようとすると…

銀がものすごいスピードですれ違って屋上から地上へスカイダイ

ピングを決行した。

「なんで銀は結社にスカウトされてないのかしら……」

そんな常人の理解の範疇を超える光景を見てもリアは平然としながらそれを見届ける。そして、それを追いかけるように支援課メンバー+aが上ってきた。

「リア！銀はどこに行った！？」

そんなロイドの問いに……

「紐なしバンジーをしてったわよ」

「……はあ！？この高さをか！？」

リアは端的に一言で表し、ランディがありえねーとも言いたげな視線を送る。いやでも、あんたの父親である『闘神』とかにもできそうじゃね？ってなセリフを飲み込む。絶対に怪しまれる。ちなみに私もできるけどね！ってなセリフも飲み込む。絶対に頭がおかしやつとか思われる。

とりあえずリアは呆然としている支援課メンバー+aを見て言った。

「とりあえず……早く帰らない？」

その言葉が、今回の星見の塔の調査終了の言葉となった。

あくまでここにいるメンバーの話だが。

第六話 序章のエピローグ的な？

星見の塔。数分前まで特務支援課メンバー + aと銀が激闘を繰り広げた場所。そこに、虚空より一人の男が姿を現す。狐をかたどったお面をかぶり、忍び装束と呼ばれる真っ黒な衣装を身にまとっていた。

「……………」

その男はあたりに何の気配もないのを慎重に確認しつつ、あたりを探索し始める。そして一番最初に目についた巨大な本棚に歩み寄り、その中から適当な本を一冊だけ抜き出した。パラパラとめくり始める。

しかし、その本には全く持って馴染みのない、「人が読める物なのこれ」と、言いたくなる文字で書かれている。

「読めぬな……」

まあいい。そう一人ごちながら、その本を棚に戻す。ほかにも床や階段も念入りに調べてみるものの特に仕掛けがあるようには見受

けられない。

「ふむ…この塔自体には特に変わったものはない…だが、しかし。上位三属性の影響を受けた魔獣に屋上の鐘…か」

おそらく、あの鐘がここの異常の原因なのだろうと狐面の男は見当をつける。さつき青く光ってたし。と、そろそろ報告に戻るか。そう思い至り、踵を返した時だった。

「隊長さ〜ん。月の僧院の調査報告っす」

「隊長。お疲れ様です」

と言いながら虚空より現れた二人。声からして片方は男で忍び装束と呼ばれるゼムリア大陸よりも東にある遠い異国の服を身にまとっていて、猫のお面をかぶっている。もう片方の女性の方は、くのーといった感じの微妙に露出度の高い衣装を身にまとい、同じく仮面をかぶっているのだが…みっしりのお面だった。ミシユラムで好評発売中です。

緊張感を粉々に粉碎する驚異のお面である。

そんな「仮装パーティ？」みたいな感じの二人だが、その二人の男女はその仮面を外し、狐面の男に素顔を晒す。それが彼らにとつてのルールだからだ。

男の方は軽薄そうな笑みを顔に張り付け、遊び人っぽい雰囲気纏っている。不細工ではない。どちらかと言えばカッコいいと言える顔立ちをしている。

しかし、大抵の人間はこの二人一緒に見て、そのことに気づくことはないだろう。それよりも女性の方が目を引くのだった。

女性の方をまず最初に見て大抵の人間がこう思う。

美しい。

女性はとんでもなく綺麗で整った容姿をしていた。墨を落としたように真っ黒な髪をセミロングにしている。大和撫子と言う表現がピッタリだ。

しかし初対面の人間は次の瞬間には嫌悪の表情を浮かべる、そう思わせるような物があった。いや、あるのではなく、無いといった方が正しいのか。

その美しい女性は左腕がなかった。左肩から先がないのだ。

しかし、そんな光景を見てもここにいる三人は誰も驚きはしないし、眉毛一本動かすことはない。そんな事は彼らにとっては些細なことだった。

それどころか隊長と呼ばれた忍び装束で狐面の男はハアっとため息を一つ。

「なあ…みっしいさあ…なんでみっしいのお面なんだ？雰囲気ぶち壊しだろう…なんかその服装も微妙にエロいし」

「主が…『こつちの方がエロ可愛いから！』とこれの着用を義務付けられました…」

「まあ、主がそういうのなら仕方ないが…まあエロいのに越したこ

「とはないしな」

「そうっすよね」

と、言いながら二人の男達はみっし面の女性の胸元や、太ももやらを視姦し始める。

「何やってるんですか!!」

どうもみっし面の女性は恥ずかしいようで胸元を隠しながら言うのだが仮面のせいで素顔は見れないのでよく分からない。

「いやいや、あれっすよ。こうして人間の三大欲求である、性欲を刺激し、生存本能を呼び覚ます。それにより、俺らの生存率を高める効果が…」

「そのぐらいにしておけ、猫」

「隊長もめっちゃ見てたっすよね？」

「仕方がないだろう。男の悲しい性だ。というかこういう話題に一番食いつきそうな狸の奴はどうした？あのエロと変態の権化は？」

「…帰る途中に…メイリンという名前の幼女を見かけてしまい…オ―バルカメラを取りに戻って行きました…」

「何をやっているんだあいつは…あいつらしくはあるのだが…」

はぁ、とため息をつく。

「…しょうがない。二人とも、報告を聞かせろ」

「了解っす」

「分かりました」

数分後…

「ふむ…ここ、星見の塔とさほど変わったものはなさそうだな…出現した魔獣の種類ぐらいか」

「そうっすね…そして共通点は鐘…」

「十中八九アーティファクトで間違いないかと」

「だろっな」

「どうするッすか？誰にも見つからずに回収ということなら…そうっすね…俺ら「致死軍」が五人ほどいれば何とかなるっすよ」

そういう猫面に対し、狐面はいや…と首を振る。

「そこを判断するのは私たちではなく主だ…しかし、主の性格上そのようなことにはならんだろう」

「それもそうっすね…主だったら…まあ、持ち帰ってまでの興味は示そうとしないと思うッす」

「でしよっね…」

「そういうわけだ…下がっていいぞ」

「了解っす」

「分かりました。お疲れ様です」

そういつてみっしい面と猫面の二人は虚空へと消えた。それを見届けてから隊長と呼ばれし男は、はぁ…と再びため息をつく。

「帰るか…」

そして、狐面の彼も…虚空に消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2726z/>

狂った少女はただ笑う

2011年12月19日13時47分発行